

心をうつす家

～部分から発生して一つの建物をつくる～

20643028 小椋 夕子

指導教授 小形 徹

【目的】『小さな世界』からの出発

私は、人を取り巻く一つ一つの物やある部分には『小さな世界』があるのではないかと考えている。『小さな世界』を注視することは、物の持つストーリーや生き物のストーリー、聞こえない音を感じたり見えないものを感じたりする事である。

例えば、ある物を見た瞬間にその物に関する記憶が頭の中によみがえってきてその世界を感じる事ができる。また、地面が太陽の強い光を浴びているのを目にすると実際には鳴っていないはずのジリジリという音を感じることもある。

『小さな世界』を感じる事で人の気持ちに小さな変化が生まれる。そしてそれを感じられる事が暮らしを豊かにする大きな要素になると考えた。

このプロジェクトでは、手に触れる感触や、一つ一つの物・生き物など、自分が直に感じているスケールである『部分』から出発して、一つの建物を作り、その建物が現代社会においてどのような意味を持つのかについて考えた。

【手法】断片的な空間のイメージから住宅を計画する。

スケッチと詩のような散文を用いて設計を進めた。(図 1、図 2、図 3、図 4、図 5、図 6)

人が生活する空間には多様な秩序が存在するが、その秩序は、そこに住む人によって決められていると考える事は出来ないだろうか。

例えば、人がそこでしたい行動に必要なものだけをその周辺に集めたり、外に広がる美しい風景を求め開口を開けたりする。住人がその場所やそこでの行動をどのようなものにしたいかによって空間や集まる物に差異が生まれる。

この計画ではこういう事がしたい・こういう物が欲しい、そのためならこういう雰囲気がいい・こういうことを感じたいという断片的なイメージから空間をつくっていかうと考えた。

このような空間のとらえ方やあり方をスケッチと散文を用いて設計できるのではないかと考えた。空間のイメージはスケッチで表現する。そしてスケッチで表わしきれないそこでの行動や感じる事について詩のような散文で表現していく。そうしてできた断片的なイメージがつながったり重なり合ったりして一つの建物となり、そこに住む人の心の内側（インテリア）をうつす家となる。

【計画概要】ある 20 代の女性が暮らす住宅(図 7、図 8、図 9、図 10)

この住宅には、建物をつなぐ大きな居間がある。(図 1)居間には、大きな窓があり、そこから入る光により大きな太陽の動きを感じられる。具体的な用途を持たないため一見余分なものに感じられるが、この居間が住宅全体にゆとりを与えている。

次に特徴的な部屋は地下室である。(図 5、図 6)この地下室は部屋の半分以上が地下に埋まっている真っ暗な部屋である。入り口以外に開口が無く、周りは厚い壁に囲まれている。外の世界から切り離されているので私はここで心をむき出しにしていろいろな感情を吐き出す。

この二つの大きな部屋を中心に玄関、洗面所(図 2、図 3、図 4)、脱衣所、風呂、台所・食堂、作業場、図書室などの日常生活が行われる部屋がくっついているような形になっている。その仲間に入れてもらえなかったトイレだけは離れとして配置される。

こうして出来た建物を見てみると、小さな部屋では普段の気持ちで日常生活が行われ、大きな空間では何も考えずにただ太陽の動きや自然を感じているというように、空間と自分の心がシンクロしているように感じられた。また、内側から見るととても特徴的な住宅だが、外側から見ると木に覆われていることもあり普通の住宅が建っているようにしか見えない。

【省察】心をうつすこと

この住宅には、とても大きな部屋や天井がすごく高い部屋など、普通に考えれば無駄に感じられるような空間が存在する。また、トイレが離れになっているなど不便に感じられる個所も多数存在する。しかしこうした一見無駄で不便に感じられるような空間こそが心に何かを感じさせ、気持ちの変化を生むものとなる。それは通常人の暮らしにおいて求められる利便性・機能性と同じくらい人の生活において大切なことなのである。